

年下攻め・夜尿症の芸能人受け

すれ違いです。オムツ。ハピエン。

「……い」

（ん……？）

「……で……」

（何……？）

小さな声が聞こえる。何だろう。太一……？

ゆっくり目を開けると、すごく近く――すぐに触れてしまう距離に太一の顔があった。覆い被さっている。

「っー」

思わず胸を押し返してしまった。太一がバツの悪そうな顔をする。

「……悪い……」

「太一くん……？」

一体何をしていたのだろう。つい驚いて押し退けてしまったけれど。

「……ごめん」

太一は上体を起こすと口元を手で覆った。

（もしかして、キス……？）

都合のいい解釈をしているのだろうか。でも、そうとは思えなかった。

「……えと……その、今、何を……？」

「ごめん……」

「何をしようとしたの？」

少しでも口調を強めると、太一はベッドを睨みつけるようにして言った。

「……キス……」

「っ……」

（嘘、本当に……？）

嬉しい。そう思うけれど、どうして、という思いもあった。

だって何も聞いていない。何も言っていない。両思いだったら嬉しい。でもそれならきちんと響の気持ちも聞いた上でしてほしい。

それに、眠りに就く前の違和感も気になる。どうして怒っていたのだろう。怒っていた理由も分からず、そのまま流されて眠って起きてキスなんて、何を考えているのか分からなくて怖い。

「……やだ」

「……うん、ごめん」

「友達のままキスはしたくない」

でも寝る前のこの話より、今は太一の気持ちが知りたかった。だって、もしかしたらすごく幸せなことになるかもしれない。

「え？」

普段はすごく勘が鋭いの、どうしてこういうときは鈍くなるのだろう。恥ずかしいから言葉になんてしたくないのに。

「……好き」

「え」

「って……寝る前も言ったのに……」

うん、と返してくれたのは空耳だったのだろうか。それとも何と言っているかは聞こえなくて、でも何か言ったらからと無視はできずにただ返事をくれただけだったのか。

「……恋愛感情で？」

「……僕、友達とかもないし……気軽に好きなんて言わないよ」

「ああ……うん、ごめん。俺も好きだよ」

（夢……？）

まだ夢を見ているのだろうか。さっきは「好き」「うん」の無限ループの夢だったから、今度こそと脳がはりきっていい夢を見ようとしているのだろうか。

「本当？」

「本当。勝手にキスしようとしてごめん」

「ううん……」

こういうときはどうしたらいいのだろう。ドラマでは何と言っていたんだっけ。

「好きだよ。響、可愛い。好き」

響の言葉を得ようとはせず、まるで言葉でマーキングをするかのように太一は何度も何度も繰り返した。まるで夢の中の響みたいだ。

夢の中——けれど太一は「うん」しか言わなかった。言ってくれなかった。それは当然夢の中の話だと分かってはいるけれど、それでもいざ好きだと言われてみるとどこを好きになってくれたのかが分からず心の底からは喜べない。

「あの……なんで？」

好きというのは本当なんだろうか、と迷ってしまう。

「ん？」

「僕、好いてもらえるようなところ……」

確かにファンクラブだってあるけれど、それは「キョウ」のファンだ。カメラの前では男らしく振る舞っているつもりだし、ファンの女の子からはかっこいいと言ってもらうことは多い。

でもそんなファンの子たちは当然おねしょとかオムツとか、こうして甘えて寝る姿とか、そんなことは何も知らないのだ。作られた「キョウ」としてのイメージを見てかっこいい、好きだと言ってくれているだけに過ぎない。

それに対して太一はむしろそういう響を知らない。二十七歳にもなってオムツをして、甘えたがりで、料理もできないダメな姿しか見ていない。好いてもらえる要素がどこにあるのかが分からない。

「可愛い。それだけじゃダメ？」

そんなのダメに決まっている。だって例えば今は可愛いで通じたとしても、この先を考えたら確実に老いるし、そしたら可愛いとは程遠くなってしまう。今の若さを保てるわけじゃないし、老けたからと捨てられるのは嫌だ。

「やだ」

「でも全部可愛いんだよ。顔もだけど、甘えるところも、寝顔も。声も、目も、パイパンも、オムツも、小さいことも」

ここ、と言いながら太一は響のオムツを撫でた。

「っ……やだ……」

なんでそんな性的なことばかり言うのだろう。若いから仕方ないのだろうか。いやらしいことしか好きになってもらえていないのだろうか。

以前出演したドラマで、身体目的の恋愛について扱っている回があった。そのときはつい感情移入してしまって何度も本当の涙を流してしまい、何度も撮影を中断させてしまった。演技でもそれくらい悲しい扱いだっただ。それなのにもし太一にそんなことをされたら――。

「それに、守ってやりたいって思う」

「え……？」

もう、太一から掛けられる言葉はないのかと思っていた。でもまだ続きがあった。性的な可愛いだけじゃないかったのか、と少し気持ちが浮上する。

額にキスを受けながら言葉の続きを待つ。

「仕事が大変なら少しでも休ませてやりたい。できればもう少し負担の少ない仕事に転職してほしいと思うけど、でもやりがいがあるって言ってたし……正直嫉妬で気が狂いそうだけど」

「太一くん……」

苦しそうな声に、嘘は感じられなかった。

「好きじゃなかったらわざわざ寝に来ないよ」

「……うん……」

「じゃあ、逆に響は？ 好きって俺のどんなところを好きって思うんだよ」

「あ……えと……優しいところ。あと筋肉も好き」

「響だって俺が言ってるのと変わらないじゃん」

「え……そんなことないよ」

好きすぎて上手く言葉にならないだけだ。役では好きだの愛してるだのと口にすることもあるけれど、こうしてプライベートで自分の気持ちとして言葉にしたことは一度もない。

「じゃあどんなところが優しいと思う？」

「……抱っこで寝てくれるところとか、お風呂に入れてくれたり、ご飯作ってくれたり……あと、その……オムツも……馬鹿にしたりとかしないし」

「そりゃあするわけないじゃん。可愛いなって思うし、そもそも夜尿症なんて病気みたいなもんじゃん。治るなら治った方が響の為にはいいのかもしれないけど、俺はそのままいてほしいと思うし」

「ほんと？」

「本当。むしろ夜尿症になるほど何かつらい思いをしたのかなって思うと、余計に守ってやりたくなるよ」

「……ありがとう……やっぱり優しい」

「別に普通じゃん」

「普通じゃないよ」

「それに、さっききつい言い方しちゃったし……」

急なトーンダウン。寝る前の、廊下での一件を太一も気にしていたんだと知る。

「あ……あれは何だったの……？」

訊いてもいいのだろうか。もしダメなら言いたくないと言ってくれるだろうと信じて言葉にすると、太一は苦笑しながらも理由を話してくれた。

「響の仕事のこと考えてて、こんな可愛い響を色んな奴が見てるのかなと思ったら嫉妬しちゃって。俺ももっと、俺だけが知る響の可愛いところを見たくてさ……嫉妬だよ。本当にごめん」

「ううん……嬉しい」

太一が嫉妬してくれていたなんて。嫉妬からなぜオムツへの排泄になるのかはよく分からなかったけれど、嬉しかった。

（あ……けど仕事、もしかして気付いてるのかな……）

もしかしたら最初から響のことを知っていたのかもしれない。けれど最初におねしょもしてしまったし、もしかしたら気にさせないようにと知らないふりをしてくれていたのかもしれない。

（やっぱり優しい……好き……）

「本当にごめん。でも、オムツに排泄してるところ見たいって言うのはホントだけど」

「えっ……」

恥ずかしい。そんなのが見たいなんて。

「いや？」

「や……嫌、とかそういうんじゃないって……その……見てどうするの？」

「え……まあ興奮するかな」

「っ……恥ずかしい」

恋人同士というのはこんなに恥ずかしい会話をするのだろうか。仕事での疑似恋愛なら何度もしてきたけれど、こんな恥ずかしい話をしたカップルなんて一度もなかった。

「真っ赤。可愛い。まあ、それは追々でいいよ。で、あとは筋肉だっけ？ 筋肉なんてもっと鍛えてる奴いっぱいいるけど」

追々、ということは結局いつかはそんなことをするのだろうかと思うと恥ずかしいし隠れてしまいたくなるけれど、今は話の続き——らしい。ペースがよく分からないけれど、見限られないようにちゃんと太一についていきたい。

「あの、でも太一くんの筋肉だから好きなんだよ」

素直に言ったのに、太一はよくわかんねえ、と笑った。

「でも好きなだもん」

「うん。俺も好き。ちゃんと信じてよ」

「うん……」

なかなか自信が持てない。でも信じたい。信じて、と太一が言ったから。

「可愛い。まあ、そのうち信じさせるよ」

恥ずかしい。今日は可愛いのパレードだ。

ぎゅう、と抱きしめられて、頭を撫でられる。

「寝るの？」

「幸せ噛みしめてる」

思わずふふ、と笑ってしまった。

~~~~~

顔を赤らめながらおかえりと言う響は可愛くて、今すぐ押し倒したい衝動にかられた。けれど昨日も一日仕事をしていた響の身体を思うとそんなことはできなかった。

「響、オムツは？」

「……意地悪」

響はこれまで自分でオムツに書き替えて待っていたことは一度もなかった。だからきっと今も下着だろうと分かりつつ、どうしても恥ずかしがる顔が見たくて訊いてしまう。

「それより太一くん、お風呂は？」

「ああ、家でシャワー浴びてきた」

自分でも馬鹿だったなと思うけれど、水道代のことによく思い至ったのだ。もしかしたらこの家賃を払っているのは客なのかもしれないけれど、光熱費くらいは響が自分で払っているかもしれない。それなら当たり前のように使つてはいけないと気付いた。

客に対して嫉妬しているくせに、大切な響の身体で稼がれた金で払われる水道を使う。それがどうしても嫌だった。

「……そっか」

なのに響は悲しそうな顔をした。水道代が浮いてラッキーと思わないのだろうか。一人増えると公共料金の支払いだって大きな痛手になるだろうに。

「寝よう」

「え……あ、うん」

響の遠慮がちな態度にイライラした。恋人同士になったはずなのに今までと変わらずずっと気を遣っている。堂々としてくれていいのに。

それにどうして仕事を辞めないのか。他の男に触らせて、響からも身体に触れて。そんな仕事をどうして続けていられるのかと。

それとももう慣れ過ぎて感覚がおかしくなってしまうているのだろうか。恋人と仕事は別、そうやって割り切れるようになってしまっているのだろうか。

もしくはそれほど客とのセックスが気持ちいいのか。恋人ができて一度知った快感が忘れられなくて辞めようという気にすらならないのか。

「響」

「え？」

通い慣れた響の部屋。一番長く過ごしたのは寝室だ。むしろここでは風呂トイレキッチンダイニング寝室しか使っていない。他の部屋のドアなんて開いたことすらないし、ダイニングに繋がっているリビングなんて通るだけでソファには座ったことすらない。

もしかしたら、知らされていないだけで本当はもつと休日があるのかもしれない。もしくはこの部屋を与えている「客専用の日」とか。そんな日は一日中このベッドで――。

全ては想像だ。けれどどうしたってその想像が正しく思えてしまう。

響は何も言っていないというのに、怒りに任せて細い腕を掴んでベッドに放り投げる――大事にしないといけないと思った細い腕を強引に掴んで。

「わっ！ や、何っ……太一くん、どうしたの？」

こういう強引な行為にも慣れているのだろうか。そういうプレイが好きな客がいるのか。それとも響自身がかようなプレイが好きでそういう客とこういうプレイばかりしているのか。

「抱きたい」

「え……」

初心なフリ。慣れているくせに。その初心なフリが余計に苛立つ。

「抱きたい。響のアナルに突っ込みたい」

「えっ……や、何……太一くん？ どうしたの、急に」

イライラする。どうしてそんなことを言うのか。他の男にはやらせているくせに。もっとどぎついことをしているはずなのに。

「抱かれたくない？」

「っ……今は……やだ……」

（やられ過ぎてケツが痛いとか？）

「なんで？」

「なんでって……だって太一くん、変だよ。おかしいよ、どうしたの」

「おかしい？ 好きな相手を抱きたいと思うのは当然だろ」

「っ……でも……」

怯えているように見える。でもこれも演技かもしれない。強引プレイを盛り上げるための演技。

「や……太一くん……やだぁ……」

「……響……」

自分を守るようにして抱かれた腕。揺れる瞳は本物だった。

「ごめん……」

ゆっくりと手を伸ばすと、それに合わせて響は後ずさった。

「響……」

「や、やだ……やだあ……」

いやいや、と首を振っている。怖がらせてしまった。

「響、ごめん……」

響は目に溜めていた涙を零した。泣かせてしまった、と後悔するがもう遅い。そして鼻を突く臭い。最近この場所でもよく嗅ぐ臭いだ。

「響、」

「あ、うううう……」

失禁、というのか。それともお漏らしというのか。響は股間をぐしょぐしょに濡らしていた。

「響、ごめん。本当にごめんな。もうしないよ。しないから」

また拒絶されるかもしれない。でもそれは自業自得だ。そう思いながら床に膝をつきゆっくりと手を伸ばす。

「響、ごめんな」

「うう……やだあ、怖い……」

「響、もう怖いことはしないよ。な？ だからお風呂で身体を綺麗にしよう」

このままでは身体が痒くなってしまう。

「ン……太一くん……」

名前を呼ばれたことにほっとして、そのまま膝でベッドに近付く。

「触るよ。怖いことはしないから」

「ン……」

お漏らしをしているのに、それを気にする余裕もないらしい。まるで本物の子供みたいだ。

「ごめんな」

脅かさないようにゆっくりと身体を近付けて抱きしめると、響も頬をすり寄せてきた。もう二度と怖がらせない、と胸に刻みつけながら頭を撫でる。

「ごめん、本当に……」

「ン……いい……抱っこしてて」

「うん。ああでも、痒くなるよ」

「え……？」

「お漏らししてる。おしっこ、出たの気付かなかった？」

「え？ あ……やつ、うそっ」

「っ！ 大丈夫、怖くない。大丈夫、俺が驚かせたから。怖かったよな。本当にごめん」  
パニックにならないよう抱きしめ、落ち着かせるように背中を撫でる。

「大丈夫、びっくりしたな。ごめん。怖がらせて本当にごめん」

「や……やだ、太一くん、汚れちゃうから」

「大丈夫。響のおしっこは汚くないよ」

「やつ、なにっ、汚いよ。汚いっ」

「汚くない。お漏らししてるとこ、本当の子供みたいで可愛かった。俺が怖がらせたくせに、そんな風に思っでごめんだけど」

「……ばかぁ……」

しばらくそうしていると次第に響も落ち着きを取り戻した。床が汚れないよう、シーツで身体を包んだ状態で風呂場に運ぶ。

「綺麗にしよう」

「や、僕自分でっ」

「ダメだよ。俺のせいだから俺がちゃんと綺麗にする」

シーツを巻いた状態のままシャワーを掛けて尿を流していくと、ツンとした臭いが次第に消えた。それからシーツを外してズボンも流す。

「本当にごめん」

「ううん……怖かったけど……でも抱きたいって嬉しかった」

「本当に？」

「うん。僕、太一くんのこと大好きだから」

漏らしてしまうほど怖がらせたのに、健気にそう言ってくれるところが愛しい。

それでもきつと、当分抱くことはできないだろう。きつと平気だと言いながらも響は怖がる。ゆっくり抱きしめるところから始めなければ。

「俺も好きだよ」

湯気に包まれながら触れるだけのキスをした。

~~~~~

「……三年経ったら三十、だよな」

「うん、そうだよ」

何やら深刻な様子に一気に不安が噴き溢れる。

「あの……太一くん？」

普段から可愛い可愛いと言われているので、もしかしたらずっと年齢を意識していなかったのかもしれない。だから急にリアルな年を意識して嫌になったのか。

「三年って長いよな」

「え？」

「三十歳まで待たせるなんてできないわ」

「え……たい、ち……くん？」

「ごめん、響の大事な時間、無駄にさせられない」

「え……？」

一体何を言おうとしているのだろう。



いや、聞かなくても分かる。嫌だ、聞きたくない。  
「別れよう」

約6万2千文字です。ハピエン。宜しくお願い致します！

ツイッター@goneone11

商業や同人の新作情報・裏話・没シーン等公開しています。